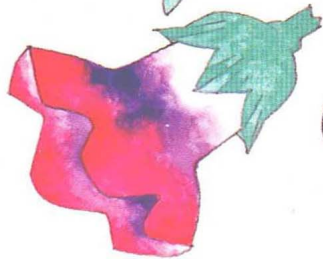


風祭

かぎ

まつり

平岩弓枝



角川文庫

かざまつり
風 祭

ひらいわゆみ え
平 岩 弓 枝



角川文庫 6129

昭和六十年六月十日 初版発行

発行者——角川春樹

発行所——株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二一十三—三

編集部(〇三)二三八—八四五—

電話 営業部(〇三)二三八—八五二—

〒一〇二 振替東京③一九五二〇八

印刷所——大日本印刷 製本所——多摩文庫

装幀者——杉浦康平

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

定価はカバーに明記してあります。

Printed in Japan

風祭

平岩弓枝



角川文庫 6129

目次

レマン湖	五
新婚	六
過去	七
變死	九
休暇	一六
初夜	一四
珊瑚礁	一三
戸籍	二二
密室	二八
解説	二七

中島河太郎

二七

二八

二二

一三

一四

一六

九

七

六

五

レマン湖

一

そのホテルの前庭は湖にむかっていた。
やや高台にあるので、見晴らしが良い。

新倉三重子^{にいくらみえこ}が滞在している五階の部屋のベランダからは、ウーシーの船着場を出て行くレマン湖周遊船もみえれば、対岸の町もかすかに眺め^{なが}られた。

七月のこのあたりは、すでにパカンスのシーズンだが、町に喧騒^{けんそう}はなかった。

昨日、三重子が登山電車でローザンヌのオールドタウンと呼ばれる地域に、知人を訪問した時、ついでに立ち寄ったカテドラルの中に、ちらほらと観光客らしい姿をみたぐらいのものである。

ローザンヌへ来た用事は、昨日で終っていた。今日は好きなように、この町で過す心算^{つもり}であつた。

シヨンの古城へ行ってみたいという三重子の相談に、このホテルのコンシェルジュは、遊覧船を利用することを勧めてくれた。

ジュネーヴを発着点として、レマン湖を周遊する船の中に、シヨンまででVターンするコースがある。

ローザンヌから東へヴヴェイ、モントルー、シヨンと廻まわって逆戻りして来る単純なものだから時間もそうかからないし、船上からの眺望もなかなかのものだと教えられて、三重子は、その気になっていた。

白のスラックスに、薄いブルウのシャツという軽装で、三重子はホテルを出た。念のために、白い木綿のジャンパーを小脇こわきに抱えて、肩からはポシェットと小型カメラ、足許あしもとは旅行用の運動靴で坂道を下って行く三重子は日本にいる時よりも遥はるかに若々しい気分になっていた。

もともと、三重子は日本でも十歳以上、若くみられるのが普通であった。結婚をしていないせいかも知れなかったし、小柄で童女のような彼女のイメージも、年齢を感じさせなかった。加えて、彼女は年齢というものを、あまり意識しなかった。

二十歳で、外交官だった父親に死別し、三十歳で母が病死したことは、彼女が結婚しそびれた大きな理由になっていたが、三重子はそれを苦にしたことがなかった。

学生時代、よく友人から天性の楽道家といわれたが、ものにこだわらない、おおらかな資質を持っていた。といって、荒っぽい性格ではなく、むしろ、繊細でよく気のつく娘として育って来た。

ウーシーの船着場には、二十人ぐらいの先客がジュネーヴから来る船を待っていた。

まだ時間は充分すぎるほど余裕がある。

シヨンまでの往復の切符を買って、三重子は日だまりに立って湖を眺めていた。

暑いという陽気ではなかったが、木綿のシャツで不都合はない。

アメリカ人らしい観光客が湖上を走るモーターボートへカメラのシャッターを切っていた。ボートから若い娘が人なつこく、手をふっている。

ふと、三重子は誰かの視線を感じた。

こうした場合、いきなりふりむくことの不躰さを、外交官の娘として育った彼女はよく心得ていた。

湖を見廻すようにして、さりげなく体の位置を変える。

相手は十メートルばかり先の水飲み場のところに立っていた。

三重子の視線に合うと、慌てて眼をそらしたが、すぐに、又、こっちをみている。

日本人だろうか、と思ひながら、三重子は船着場のほうへ移動した。

外国で、日本人と思って声をかけたら、中国人だったという話をよく聞く。

しかし、注意してみれば、日本人と中国人では、同じ洋服を着ていても、色や柄の好みが多まるで違っていた。

二度とふり返ってみなくとも、三重子はその男の服装を記憶していた。

グレンチェックの上着にグレイのスラックスであった。ネクタイはなく、白いスポーツシャツを着ている。

背はやや高く、眼つきに鋭いものがある。年頃は四十のなかばぐらいだろうか。手にしていたカメラは、プロが持ちそうな高級品である。

船着場に、英語とフランス語とドイツ語のアナウンスが流れた。

ジュネーヴからの船が、接近している。

思ったより、大きな船であった。サンデッキには、いくらか寒そうな水着姿の若い女が堂々と寝そべっている。

船へ乗るための行列に加わりながら、三重子は、男が切符を買いに走って行くのをみた。彼もこの船に乗るつもりなのかと少々、警戒の気分になった。なによりも、眼つきの悪さが剣呑であつた。

もう、旅先で男を怖がるほどの小娘ではないと思ひながら、下手に話しかけられるのは厄介である。

素早く思案して、三重子はデッキへ上って行つた。キャビンの椅子席ではうっかり隣にすわられでもしたら、逃げようがないが、デッキなら傍に来られても、さも用ありげに場所を交えることが出来る。

デッキは太陽がまぶしかつた。デッキチェアは各自が好きな方向へむけてすわっている。その一つに腰を下して、ポシエットからサングラスを出していると、前方のデッキチェアから男が立ち上つて来た。

「失礼ですが、新倉三重子さんじゃありませんか」

顔を上げて、三重子はサングラスをかけたばかりの眼で、相手を見つけたわけではなかった。髪にいくらか白いものがまじっているが、十年前と殆んど容貌は変わらない。

「僕が、わかりますか」

「佐和木さんでしょう。佐和木良行さん」

デッキから立ち上って、お辞儀をした。

「あんまり偶然なので、びっくりしましたわ」

「僕もですよ。まさか、こんなところで、新倉さんにお目にかかるとは思っていませんでしたからね」

「ジュネーヴから乗船なさいましたの」

「そうです。あなたはウーシーからのようですね」

「ローザンヌに来て居りましたの」

船がゆっくり動き出した。

「お隣へ、かけてもいいですか」

遠慮そうに佐和木はいい、三重子がうなずくと嬉しそうに、腰を下した。

麻の上着に、茶のオープンシャツ、素足にデッキシューズというパカンスの服装が板についている。

「商用でジュネーヴに来ているんですが、何度来ても、シヨンの城まで行ったことがない。

ちようど、今回は日曜が入ったので、思い立って、船に乗ったんです」

船に速度が加わると、デッキを風が渡りはじめたが、寒いというほどのことはなかった。

「私は、叔母の用事で、ローザンヌへ。一昨日、ジュネーヴ経由で参りましたの」

「叔母様は、お元気ですか」

佐和木の声に、多少の屈託を感じて、三重子は正直に打ちあけた。

「歿きぐなりました。今年の三月二十七日です」

「御病気ですか」

「以前から肝臓が悪かったものですから」

「そりゃあ……」

「叔母の大学時代のお友達がローザンヌにいらっしゃるんです。遺言で、形見の品をお届けに参りましたの」

三重子の母方の祖父も外交官であった。その関係で、若き日の叔母はロンドンとスイスに同級生が居り、その中の何人かとは、死ぬまで交遊関係があった。

「ローザンヌのオールタウンにいらっしゃる方はリュウマチを患っていらして病院に入っておいでだったんです。叔母のこと、申し上げにくくて困りましたわ」

「叔母様、おいくつでした」

「六十二歳でしたの」

「まだ、そんなお年でもなかったのに……」

佐和木良行は表現に苦勞しているようであつた。

十年前、佐和木と三重子の間に縁談が起つた時、最後まで強く反対したのが、叔母の高田俊子であつた。それだけが理由ではなかつたが、三重子は佐和木のプロポーズをこゝろで、今だに独身が続けている。

佐和木のほうは、その後、結婚したと風の便りにきいていたが、三重子はいま、そのことについて訊ねようとは思わなかつた。

「ローザンヌは、どちらへお泊りですか」

「ボウ・リヴァージュホテルです」

かくす心算はなかつた。

「あそこは格式が高いでしょう」

佐和木が微笑した。

「加賀先生の御推薦ですね」

加賀利之が外交官として、長期間、スイスに滞在していたのを、佐和木は思い出したようであつた。ヨーロッパ各国の大使を歴任した加賀利之は外務省を退職した後、外交評論家としてもつぱら書齋生活をしている。

「今でも、加賀先生の事務所で働いていらっしゃるんですか」

三重子がジャンパーを肩にかけようとすると、佐和木は素早く手伝つた。

そういうところは、むかしと同じで、外国の男性と同じようによく気がついた。

「他に、することがありませんもの」

亡父の友人であった加賀利之の秘書をするようになったのは大学を卒業してから、二年間、ロンドンに留学をすませて後である。

経済的には亡父の遺してくれた資産がかなりあって、働かなくとも食べて行ける状態だったが、三重子は語学力を生かせる就職先を求めている。

外交官時代から加賀には外国人の知己が多かった。公用、私用で外国客の訪問はひっきりなしである。彼の秘書は少くとも、英語とフランス語ぐらゐは堪能でなければならなかった。

「結婚はなさらなかったんですか」

佐和木の問いに、三重子は屈託のない笑顔で肯定した。

「贅沢な人だな。僕が知っていただけでも随分、候補者がいたのに……」

「決断力がないんです。私って……」

それには返事をせず、佐和木は立ち上ってキャビンのほうへ行つたが、やがてコーヒールームで、自分で運んで来た。

船はヴヴェイの船着場へ寄港している。

このあたりはリゾートホテルが多かった。いずれも湖畔に近く、洒落た建物が目立つ。次に立ち寄ったモントルーの町も落ち着いた感じであった。

観光船を見物するために船着場に集つた子供達の顔がよく陽に焼けている。

シヨンの城は、その附近から、もう見えていた。

湖上に突き出したように、水に浮んだ古城の風情は、船からみるのが一番だといったホテルのコンシェルジュの言葉通りであった。

パイロンの詩で有名になったこの城のイメージは暗いものだが、湖から眺めている限り、陰惨ではなかった。

船客はみな、甲板へ出てカメラをかまえている。

三重子もたてつづけにシャッターを切った。

佐和木は、三重子の傍に立って城をみていた。彼はカメラを持っていない。

船はシヨンの城の東側に着いた。

船着場から城の入口までは百メートルもない。

船客は湖沿いの小道を通って、城の見物に行った。

三重子も佐和木と並んで城の入口を通った。

入場券は佐和木が買って来た。

城というよりは砦だと案内書には書いてあるが、案外に広かった。窓から射し込む陽光で、どの部屋も比較的、明るい。

三重子が眉をひそめたのは、地下牢へ見物に入ってからであった。

地下水が頭上から落ちてくる、その中の通路は土がぬるぬるして歩いて歩きにくかった。ここに監禁されたフランソワ・ボニヴァールをつないだ柱や鎖が今も残っていて、なにがなしに慄然とする雰囲気がある。

早々に三重子は観光コースを出た。

城の外は、うららかという表現がぴったりの穏やかな陽ざしであった。観光船がここを出発するまでには三十分もある。

「私、慌てすぎましたのね」

小道にあるベンチに腰を下して、三重子は苦笑した。

「ごめんなさい。佐和木さんはもっと、ゆっくりごらんになりたかったでしょうに……」
「僕もせっかちですからね」

城をバックに一枚、撮りましょう、といって、佐和木は三重子を良い位置に立たせて、三重子のカメラのシャッターを切った。

「三重子さんがお一人ときいて、複雑な気持ですよ」

並んでベンチへすわると、佐和木はいくらか、きまり悪そうに話し出した。

「三重子さんに失恋してから、僕は二度、結婚しているんです。よくよく女房運がないのか、二度とも死別しました」

最初の女房は一年少々で交通事故、二人目は昨年、イタリアを旅行中に、不慮の災難に遭った。

「商用で、南イタリアを廻っていたのですが、行方不明になって、発見された時は死体になっていました」

淡々と話しているのが、かえって悲痛であった。

下手なくやみの言葉も出ないで、三重子は湖をみていた。彼もそれっきり沈黙している。やっと城の橋を、観光客たちが渡って来た。

そこで、又、カメラをかまえたり、近くの土産物屋へ寄ったりしている。

「佐和木さん、今、どちらに……」

三重子の叔母の亡夫が頭取をしていた銀行につとめていた筈である。年齢的にいえば、地方都市の支店長か、本店の部長クラスだろうか。

「銀行はやめたんですよ」

佐和木の返事は意外であつた。

「どうも、僕は銀行員には向いていませんでね。七年ほど前にやめて、今は六本木に西洋骨董の店を出しています」

ポケットから財布を出し、一枚の名刺をさし出した。

西洋骨董「佐和木」と店の名に、住所と電話番号が刷り込まれている。

「それじゃ、ジュネーヴにいらしたのも、御商売のこと……」

「ええ、今回はベルンとパリを廻って帰ります」

船客がぼつぼつ、船へ戻りかけていた。

三重子も佐和木と肩を並べて歩き出した。前方でシャッターの重い音がして顔を上げると、船着場のところに、日本人の男が立って、盛んに城の方角へカメラをむけている。

ウーシーの船着場でみかけた、あの日本人の男であつた。